

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：37105

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02194

研究課題名（和文）古代教父思想における「場所」概念の研究

研究課題名（英文）The concept of 'Place' in the thought of the church fathers

研究代表者

津田 謙治 (TSUDA, KENJI)

西南学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：00532079

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：使徒後教父時代から古代末期に到るまでの初期キリスト教思想史において、教父たちや宗教的思想家たちが一方では天と地を行き来する神という聖書の字義的な意味を認めつつも、他方では漠然と神が天上や地上に存在すると捉えたのではなく、神が全能者でありながらも自らが創造した被造物である天などの場所の中に閉じ込められるという矛盾に着目しながら、「包括されない包括者」という神概念を模索しようとしていた点を明らかにしたことが、本研究の中心的な成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「神を時間軸上に位置付けられ得るのか」を問題とする時間論と比較すると、これまで初期キリスト教思想史上において十分に顧みられることのなかった空間・場所論に焦点を当てて、「神は何処にいるのか」という問題がどのようにギリシア・ラテン教父たちやキリスト教周縁の思想家たちによって展開されてきたのかを明らかにし、古代における神的存在論の重要な側面を浮彫にすることによって、この主題に関連する三位一体論などの重要な教理の形成に繋がることを解明した点が、本研究の学術的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study highlights the history of the early Christian thought between the post-apostolic fathers and the late antiquity wherein, on the one hand, the fathers and the religious thinkers admitted the literal text of the Bible that stated that God traveled between the heaven and the earth, but, on the other hand, they recognized the contradiction that God, as an omnipotent entity, dwelled in closed spaces, such as the heaven, and spaces that he himself had created, and hence, they tried to investigate the concept of God as being 'an enclosing, not an enclosed entity'.

研究分野：宗教哲学、思想史

キーワード：教父学 場所論 宗教哲学 古代キリスト教思想 質料論 キリスト教学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

18世紀以降の西洋において、理性の立場から宗教の意義を哲学的に探求する学問として宗教哲学が成立した。それは、啓蒙思想の影響のもとで、宗教を理性的に再吟味することが可能となったことが背景にあるとされている。しかしながら、哲学の側から宗教の意義を考察する思潮それ自体は、古代ギリシア・ローマ時代に遡ることができる。古代のキリスト教に限定するならば、哲学と医学に精通したガレノスや、プラトンの哲学者ケルソスが、理性の働きを重視しない立場としての宗教を批判していた。このような立場に対し、ユスティノスやオリゲネスのようなキリスト教徒たちは、信仰と理性が矛盾しないと弁明し、宗教と哲学が同時に成り立つ根拠を模索したと考えられる。中世以降、神学が哲学に対して優位な立場になってからは両者の関係がやや固定化するものの、古代において宗教と哲学の関係は、批判的対話を通じて躍動的に揺れ動き、発展していた。近代になって両者の関係を分析する宗教哲学は、その立場によって多義的な様相を示してきたが、古代における対話的議論を再吟味することによって、この分野における歴史と伝統に則した基盤的な視座の一つを模索することが求められている。

本研究は、以上のような学術的背景を踏まえ、漠然と宗教と哲学の対話に着目するのではなく、古代において行われた対話的議論の中から「場所」に関する議論に限定し、超越者ないし神の存在する場を分析する。「場所」は、宗教と哲学の間で頻繁に為された議論の一つであるが、「時間」や「超越」などの諸概念とは異なり、宗教哲学の分野で古代から捉え直す試みはこれまで十分に行われてきたとは言いがたい。このことから、「場所」に関する古代の対話的議論に焦点を当て、信仰と理性との間における新たな対話的視座の構築に寄与することを目指そうとする試みが本研究の出発点となっている。

2. 研究の目的

本研究は、古代において宗教と哲学の間で議論された「場所」概念を吟味する上で、研究の主要な対象領域を、(1)キリスト教成立以前の諸宗教における議論、(2)護教家教父と反異端教父における議論、(3)キリスト教公認前後の古代末期の議論の三つに分ける。それぞれの領域における検討課題は以下の通りである。

(1)キリスト教成立以前の諸宗教における議論

ユダヤ教では、フィロンのように、宗教と哲学の間の位置付けを模索する中で「場所」の議論を用いた思想家があり、キリスト教成立以前の諸宗教を多角的に分析する。

(2)護教家教父と反異端教父における議論

2世紀におけるこの時代に「場所」の議論が大きく発展したが、宗教と哲学の間だけでなく多神教批判に用いた思想家もあり、議論の応用可能性について分析する。

(3)キリスト教公認前後の古代末期における議論

4世紀以後、キリスト教が迫害から公認されると共に哲学との関係が変化したが、「場所」の議論は引き続き複数の思想家の中に見出され、コンテクストを含めた議論の変化を分析する。

3. 研究の方法

(1)キリスト教成立以前の諸宗教における議論の分析

研究の基盤となる文献資料を調査すると共に、研究を進める上で必要な備品等を揃えることを主眼とする。主として調査対象となる領域は、キリスト教が成立する以前のユダヤ教や諸宗教及び哲学諸派における「場所」の議論となるが、今後の研究領域で必要となる文献の調査は同時並行的に進めていくこととする。

アレクサンドリアのフィロンにおける「場所」概念の周縁的考察

フィロンが「場所」の議論を用いて哲学諸派に応答していた可能性については既に研究対象としているが、彼の議論がユダヤ教全体においてどのように位置付けられるかについては更なる考察が必要とされる。ここでは、キリスト教成立以前のユダヤ教における議論を考察する。

プラトンとアリストテレス思想における「場所」概念との比較考察

プラトンにおいて神は「場所」をある意味で存在者の材料(質料)として、物質的世界を構築したとされている。またアリストテレスにおいては、この物質的世界を外側から取り囲むものが神として理解される。古代キリスト教思想にも見られる万物を取り囲む神という思想が、ここらどのように受容されたかを考察する。

ストア主義における「場所」概念との比較考察

ストア派における「場所」概念は、アリストテレスの思想を発展させたものとして理解されるが、同時に着目すべき点は、神が「物体」として理解されていることである。古代キリスト教思想における文脈との相違を明らかにし、物体としての神が「場所」概念にどのように関係するかを考察する。

(2)護教家教父と反異端教父における議論の分析

神の特性を「場所」概念を用いて明らかにしようとする議論は、キリスト教以前に哲学思想の中で見られたものである。ここでは、哲学諸派の中でどのような「場所」の議論が行われたかを吟味した内容を踏まえ、それらが古代キリスト教思想の中でどのように受容されたかを分析する。

神の「物体」性について、明示せずに議論をしている資料の分析

神が「場所」の中に存在するという議論をしながらも、その「物体」性について論じていない

ように見える資料を分析し、その前提条件がどのように構築されているかを考察する。特に、2世紀半ばに活躍した殉教者ユスティノスの資料を用いる。

神の「物体」性を明らかに否定している資料の分析

神が「物体」ではないことを論じた上で、「場所」概念を用いて神の特性を明らかにしようとしている資料を分析する。この場合、物体でないのに場所を占有するという矛盾を、古代キリスト教思想家たちがどのように解決しようとしたかを考察し、特に2世紀後半に活躍したエイレナイオスの資料を用いる。

(3) キリスト教公認前後の古代末期の議論の分析

4世紀初めにキリスト教が公認され、その後この宗教がローマ帝国において国教化すると、宗教と哲学の対話の内容に変化が訪れる。6世紀にプラトンの学園が閉鎖されたことから窺えるように、哲学的思想は宗教に対する優位性を失い、信仰と理性の関係は再吟味されることになった。このような時代状況においても、「場所」概念は教父たちの思想の中に留まり続けている。ここでは、そのコンテクストを分析し、「場所」概念の理解の際に、これまでの時代からどのような変化が起こり、意義が見出されたのかを考察する。

神の「物体」性を肯定している資料の分析

神が「物体」であることを前提にしなが、「場所」概念を用いている資料を分析する。この立場は、キリスト教思想において例外的なものであるため、なぜこのような前提条件が持ち出されたかを考察する。特に2世紀後半から3世紀前半にかけて反駁文書を著したテルトゥリアヌスの資料を用いる。尚、このテルトゥリアヌスの思想を批判したアウグスティヌスの議論も分析する。

中世以降における神と「場所」の議論の思想史上の位置づけと意義に関する分析

神と「場所」の議論はフィロポノスを通じて中世へと手渡され、「場所」から近代的「空間」の問題へと発展していく。ここでは、このような思想的潮流の中で、本研究で扱う神と「場所」の議論がどのように位置付けられ、どのような意義を持ちうるかを考察する。

4. 研究成果

(1) 本研究の研究成果として、初期キリスト教思想家の文献を分析し、彼らがどのような文脈で神と場所の関係を論じているか的一端が明らかとなった。2018年に公刊した「万物の包括者 - 使徒教父の文書から」は、ローマのクレメンスやヘルマスなど使徒教父の資料を分析したが、ここでは既に神がすべてを包括するかたちで万物の場所となることを示唆する議論が見られる。しかしながら、哲学との批判的対話を通じた議論の展開は、後の護教家たちまで見出されず、その変化はアレクサンドリアの教父たちの文献から明らかとなった。この教父たちは、ユダヤ教徒フィロンの影響を受けており、その点を扱った研究が、2018年に公刊した「神の遍在と非場所性 - アレクサンドリアのクレメンスの議論を中心として」と2019年に公刊した「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 - 『祈祷』の議論を主軸として」である。

(2) 上述のキリスト教思想家の議論が、古代の思想史全体でどのように位置付けられるかを模索することも本研究の研究課題の一つであった。2017年に公刊した「初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 - 否定神学、悪の問題を手掛かりとして」は、神が世界にどのように関わるのかという「場所」概念に強く結び付く問題意識から、ソクラテス以後からアリストテレスやストア主義などの哲学や三世紀までのキリスト教思想における概念史を分析した。また、2016年に公刊した「『カルデア神託』における神的存在と質料 ヌメニオスとの比較を中心に」は、特に新プラトン主義に近い宗教思想から神と世界の関わりを考察したものである。

(3) 古代から中世にかけての議論の発展を追う考察として、本研究で注目したものの一つに神の物体性の問題が挙げられる。神が場所的に世界に関わるとすれば、それは物体としてなのか否かという問題は、アウグスティヌスが自らの150年以上前に活躍したテルトゥリアヌスの議論を批判する中で間接的に触れられている。この点に関する考察について、既に原稿は提出済みであるが、この研究は共著として2020年度内を目指して公刊される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 57
2. 論文標題 神の遍在と非場所性 アレクサンドリアのクレメンスの議論を中心として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『日本の神学』	6. 最初と最後の頁 49-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 91
2. 論文標題 初期キリスト教教父思想におけるオイコノミア概念 否定神学、悪の問題を手掛かりとして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『宗教研究』	6. 最初と最後の頁 153-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 32
2. 論文標題 万物の包括者 使徒教父の文書から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『西南学院大学国際文化論集』	6. 最初と最後の頁 99-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 「『カルデア神託』における神的存在と質料 ヌメニオスとの比較を中心に」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『西南学院大学国際文化論集』	6. 最初と最後の頁 85-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 38
2. 論文標題 「オリゲネスにおける神的場所概念の考察 『祈祷』の議論を主軸として」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『基督教学研究』	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津田謙治	4. 巻 34(1)
2. 論文標題 「『ヘルメス文書』に見られる神的「場所」概念の考察 『ヘルメス選集』第二冊子と教父文献の比較を通じて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『西南学院大学国際文化論集』	6. 最初と最後の頁 71-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津田謙治
2. 発表標題 オリゲネスにおける神的場所概念の考察 『祈祷』における議論を主軸として
3. 学会等名 京都大学基督教会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 津田謙治
2. 発表標題 『ヘルメス文書』に見られる「場所」概念の考察
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津田謙治
2. 発表標題 神の遍在と非場所性 アレクサンドリアのクレメンスの議論を中心として
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 津田謙治
2. 発表標題 「包括者としての神 初期キリスト教思想の神的場所概念」
3. 学会等名 日本宗教学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 津田謙治
2. 発表標題 Liberal Protestantism and Tetsutaro Ariga
3. 学会等名 Symposium "Liberal Protestantism and Christian Studies at Kyoto University" (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 W.シュスラー編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 488
3. 書名 『神についていかに語りうるか プロティノスからウィトゲンシュタインまで』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----